URL：http://88souma.com/

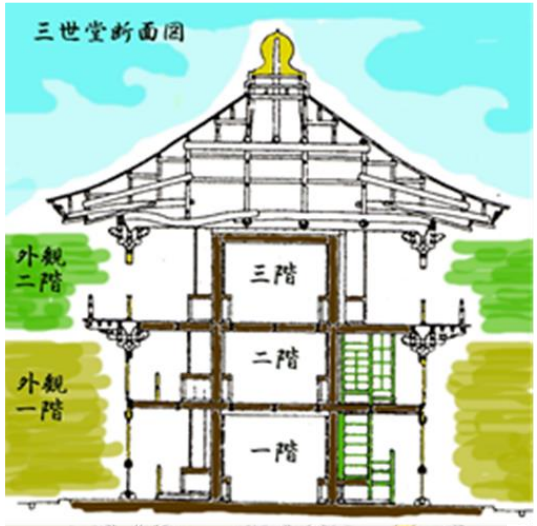
新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る
取手中心部をお遍路

取手駅東口～台宿、井野～吉田地区をお遍路して、12 時 30 分頃吉田で解散予定です。

三世堂の扁額

安永四年(1775)版
観覚光音禅師発行
「霊場石土写記」
最終頁の光音落款
が見えます。

相馬霊場取手駅周辺コース



新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り　発願（ほつがん）

常磐線取手駅西口デッキ上集合　厠

新四国相馬霊場八十八ヶ所、

新四国とは、本国四国の大師霊場から写した大師霊場八十八所に対して呼ばれます。准四国という大師霊場もあり、新四国と同様な意味をもちます。

新または准四国大師霊場は明治時代以降に建立されたところが大変多く、全国に於いては数百ヶ所あったと云われています。

しかし、四国巡りが流行した江戸元禄時代の頃に誕生した、新四国や准四国の大師霊場は数が少なく、又、八十八すべての札所が残っている霊場も少なくなった現状をみると、御堂と像が残る相馬霊場は貴重であり、歴史的意義があると言えます。

下総国（千葉県北部と茨城県南部利根川両岸）には77の四国霊場の写しがありました。最も古い大師霊場は慶応二年（1866）木食以空上人開基、野田市の報恩寺らしい。次いで享保六年（1721）本埜（もとの）の印西大師霊場だが一時巡拝中止となるが文政13年（1830）に復帰し現在に至る。3番目が相馬霊場で宝暦13年（1763）札所開基が始まりました。完成は安永四年秋と伝わっています。取手市史とは違う解釈です。

取手の春はお遍路さんの鈴の音とともにやって来る、と詠われているように、毎月廿一日は「お大師様の日」で、梅の花咲く二月廿一日からお遍路さんの旅は始められたようです。

相馬霊場は、開基されて、おおよそ二百五十年になります。

相馬霊場創始者観覚光音禅師（伊勢屋源六）

江戸時代中期の人物である伊勢屋源六（1711年～1783年）は、取手宿内で穀物商伊勢屋を営み、三軒の店を構えるほど繁盛していました。

商いの傍ら取手宿の繁栄の為に尽くし、多くの人々から慕われたといわれています。そんな折、源六は長禅寺の幻堂和尚と親しくなり、神仏に帰依する念が強くなります。そして宝暦十年（1760）、源六は家も商いも全て妻子に譲り、出家して和尚の弟子となりました。出家して観覚光音となった源六（以下、観覚光音）は、下総国相馬郡の取手宿や我孫子の村を、経文を唱えながら巡り、貧者への施しや病者への救済を行いました。

また、荒廃した長禅寺の観音堂を「さざえ堂」に改装したり、新四国相馬霊場を開設するなど、数々の功績を残しました。観覚光音の活躍もあり、当時の取手宿は大師信仰の町として近隣に名を響かせ、宿場全体が活気を帯びて繁栄しました。

晩年は、取手市白山にある金刀比羅神社（長禅寺移転前の所在地）の境内に隠居していましたが、天明三年（1783）十月十七日に、病で天命を全うしています。辞世句、**「日々に運ぶ歩みの後　消えて　行くとも知らず　もとのすみか」**

観覚光音禅師　享年七十三

なぜ、相馬霊場の札所は順番ではないのか

相馬霊場の開基は、光音禅師が「吉野三郎こと吉野川両岸沿いに広がる霊場を、坂東太郎こと利根川両岸沿いに八十八ヶ所を移す」という発想によって、利根川沿いの寺院の住職や檀家等に、札所の建立を懇願して実現しました。

しかし、全ての札所が当初の計画通りの位置に建立されたわけではありませんでした。

長禅寺にある五番札所などは、元々はある寺社に建立を計画していたようです。ですが相手の寺院側の事情により受け入れられず、残ってしまったため現在の位置に建立されたと思われています。

札所が順番ではない訳は、相馬霊場に限らず、「新四国」や「准四国」の各霊場は全国的に札所の順列は不揃いになっているところが多いようで、札所の建立は移し先の事情に合わせられている為です。

大師霊場を巡る事前の知識

南無大師遍照金剛（なむだいしへんじょうこんごう）

本堂と大師堂のそれぞれで3遍繰り返します。

◆　正式には勤行を行いますが当会では略式とします。

打始と打止、大師霊場巡りは一日では巡礼出来ない為、巡礼日最初に訪れる霊場札所を、打始という。

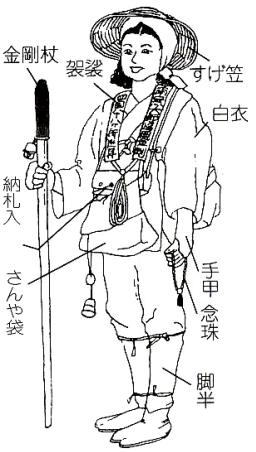
打始に対して、同日最後に訪れる札所を、打止（うちどめ）と言います。

巡拝する場合、訪れた霊場札所には、来訪した証として「お札紙」を奉納しますが、昔は「お札木」であった為、釘で打付けていました。よって紙になった現在でも「お札」と呼ばれているのです。

お遍路さん、キリスト教や世界各国に在る「巡礼」に同義語ですが、遍路とは大師巡りを行う巡礼の場合のみに使われます。大師巡りの巡礼さんは「お遍路さん」というのが礼儀で人を指します。

一時「乞食遍路」なる、偽りのお遍路が接待を目当てに多く現れました。この事実により、正しく訪れる巡礼者に対して「お遍路さん」と敬愛を込めて言っています。乞食遍路の話は相馬霊場の他、本国四国は勿論のこと全国でもあり、印西霊場や柏霊場、江戸川霊場でもお聞きして驚きました。

お遍路さんの正装



三衣袋(さんや袋)＝頭陀袋(ずだ袋)

送り大師　とは、

送り大師は、大師様を背負って訪れるお遍路です。大師像を背負って各札所をお遍路さん達と一緒に巡拝する方法です。定例行事として、また霊場巡りを永続する方策としては、大変有効な方法でした。

逆打ち(さかさうち)、左廻りでの巡拝

四国では、第一番から八十八番迄の順路は、当り前のように右廻りとされているので、なんの抵抗もなく、お寺の配置順に巡拝しようとするのが自然な行為だと思います。ではなぜ右廻りが自然なのか、僧は袈裟で左の半身を被い、右は肩を露出します。

これは「偏袒右肩(へんだんうけん)、如来が両肩を覆って着用している通肩(つうけん)に対して、仏への崇拝と畏敬の念を表す、左肩を隠すのは、仏教では左が不浄とされているため　と言い、仏への敬心を示します。露わにした右肩を常に仏にむける為に、聖なるものの周りを「右廻り(順打)」で祈ります。

逆打ちについては、衛門三郎が二十一回四国お遍路した後、逆に廻り大師に出会った伝えによりますが、逆さ打ちは「生まれ変われる」とか「死者に会える」と云い、信心深者の巡拝方法と言えます。

また、逆さ打ちの方が順打ちよりも道が険しく、道標なども順打ちを対象に記されているなど、多くの困難をともなうため、1回の逆さ打ちは、順打ち3回に相当するとも言われています。

このことから逆打ちは、功徳も2倍　と言われています。更に、閏年に逆打ちを行うと、功徳が3倍あるといわれています。

これは衛門三郎が、弘法大師に会えたのが西暦八三二年で、閏年だったことにちなんでいます。

閏年の逆打ちは、「順打ちの2倍」×「閏年の3倍」＝6倍のご利益が有る」と言われています。

一歩一歩積み上げる努力を怠っていきなり「三倍の功徳」は少々無理ですが、「始めてみよう」と発心することはとても大切なことです。

衛門三郎、天長年間(824～834)の頃の話です。

伊予国を治めていた河野家の一族で、浮穴郡荏原郷愛媛県松山市恵原町文殊院の豪農で衛門三郎という人が居ました。三郎は権勢をふるっていたが、欲深く、民の人望も薄かったようで、あるとき三郎の門前にみすぼらしい身なりの僧が現れ、托鉢をしようとしました。三郎は家人に命じて追い返しましたが、翌日も、そしてその翌日と何度も僧は現れました。八日目、三郎は怒り僧が捧げていた鉢を竹のほうきでたたき落とし、鉢を八つに割ってしまいました。

三郎には八人の子がいましたが、その時から毎年一人ずつ亡くなり、八年目には皆亡くなりました。

悲しみに打ちひしがれていた三郎の枕元に弘法大師が現れ、三郎はやっと僧が大師であったことに気がつき、後悔するのでした。

三郎は懺悔し、田畑を妻子家人達に分け与え、大師を追い求めて四国巡礼の旅に出るのでした。

しかし、二十回も巡礼を重ねましたが、大師に出会えませんでした。天長八年十月、大師に何としても巡り合いたいという一心で、八十八番から逆に巡りはじめました。

だが巡礼の途中、阿波国焼山寺(第十二番)近くの杖杉庵(じょうしんあん)で病に倒れ死期が迫りつつあった三郎の前に大師は現れました、三郎は今までの非を泣いて詫びました。大師は最後の望みはあるかと問いかけました、三郎は「来世は、河野家に生まれ変わりたい」と託して息を引き取りました。大師は路傍の石を取り「衛門三郎再来」と書いて左手に握らせたのでした。

翌年、伊予国の領主、河野息利(おきとし)に長男が生れたのですが、その子は左手を固く握って開こうとしませんでした。その左手は三年経っても開こうとせず、息利は心配して安養寺(第五十一番)の僧に頼み、祈願をしたところやっと手を開き、「衛門三郎再来」と書いた石が出てきたといいます。

その石は安養寺に納められ、後に「石手寺」と寺号

を改めたといいます。石は玉の石と呼ばれ、寺宝となっています。
熊野山虚空蔵院安養寺を改め石手寺、松山市石手2
御本尊、伝行基菩薩の薬師如来
与謝野晶子、正岡子規、松尾芭蕉、種田山頭火、宇田零雨等の句碑、歌碑、川柳碑がひしめく。

打始

第八十七番、国道6号大利根橋の愛宕神社境内。
ご祭神、過遇突智命（かぐつちのみこと）
ご本尊、将軍地蔵尊、勝軍地蔵菩薩
白馬に騎乗した戦闘鎧姿の地蔵尊像。
この菩薩は釈尊の入滅後、弥勒（みろく）の出生まで、六道の衆生を教化する菩薩。よって、供養せんとするものは、現世に福利を得、後世に極楽に生ぜん（輪廻転生）とする。
移し寺、香川県補陀落山（ふだらくさん）長尾寺
御詠歌、あしびきの山鳥の尾の長尾寺
秋のよすがら御名を唱えよ
愛宕神社は、元禄十五年（1702）の創建、ご祭神は過遇突智命（かぐつちのみこと）、御神体は鎧甲冑姿の武者の木造像です。大師も瓦焼きと古い像です。
愛宕社は大鹿村（おおじかむら）、現取手競輪場から利根川間にあったのですが旧水戸街道が出来た時に、利根川の渡船役務のために水戸家の命令で3部落一戸残らずこの地に移転となりました。その後再び水戸街道が国道6号として新生の際に社は分断して神殿は現在の場所へと移転しました、国道6号を見下ろして交通安全を願っておられるようです。
国道6号の向かい側に石引墓地が見えます。
国道6号の開通により愛宕神社と第87番札所は、東福寺境内であった石引墓地と分断されました。
大正四年初版の「相馬霊場案内」の取手町に、
<<<<<<　東福寺、寺は栗山台に在り、紀州高野山金剛峯寺の直末寺に儘（まま）す、今より20余年前、平本正志の開基する所也、本尊十一面観世音にして境内に新四国相馬霊場31番土州五台山写霊場あり、因に井野天満宮境内に在りしものを東福寺の建立と共に其の身体を此処に写したるより第31番霊場は東福寺を以て正統となす。　>>>>>>>
東福寺は、廃寺となっており現存していません。
此の寺は、吉田名主平本正志が、旧大鹿の後の地名栗山の台地の所有地に明治20年代に創建し、井野天満宮境内の札所31番霊場を同寺に遷していました。
此の頃「取手八景」なる、近江八景に追随する景勝地を詠んだもので、かつての国学者沢近嶺が撰んだものを、宮内大臣土方奏山等が詠み直した「栗山台の秋月」という旅情詩がありました。
栗山台の平本別荘には度々奏山が招待され「東福寺晩鐘」と題する詩を読ませています。
平本は、東福寺＝栗山台の名勝を定着させようとしましたが、地元民から猛烈な反対に屈している。
昭和四年の「相馬霊場案内」改訂版では、
<<<<<<<　東福寺は台宿に在り、高野山金剛峯寺の直末にして、平本正志の開基する処。　>>>>>>>
第31番は、片倉工業取手事業所正門前に移転後、井野天満宮境内へ戻って現在に至ります。その後、東福寺は相馬霊場第20番地蔵堂の後方に移って、利根川直線化時の河川下沈没の村民救済に助力されています。
懸所（かけしょ）と呼ぶ処に、この様な傾向がみられる。
平本別荘は石引墓地より取手駅寄りの栗山台地上に建っていた様ですが手放されました。
常磐線利根川鉄橋は、明治29年12月に土浦～日暮里間開通により取手駅と四ツ谷跨線橋と共に開通式が行われました。取手住人が1.5倍増したといいます。

一番、霊山堂（れいざんどう）、大鹿山長禅寺境内
ご本尊、釈迦如来。
移し寺、徳島県竺和山霊山寺　（霊山の読みにご注意）
（じくわさん　りょうぜんじ）
御詠歌、霊山の釈迦の御前にめぐりきて
よろずの罪も消えうせにけり
相馬霊場巡りの一番札所は霊山堂ともいいます。
石柱説では安永三年(1774)六月の移しです。
翌年の安永四年菊月に、新四国相馬霊場八十八ヶ所のガイド本を光音禅師は発刊しています。

第五番、長禅寺境内地蔵堂。
ご本尊、地蔵菩薩。
移し寺、徳島県無尽山（むじんざん）地蔵寺
御詠歌、六道の能化（のうげ）の地蔵大菩薩
みちびき給えこの世のちの世
六道は、地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天上界の六つを云う、また能化の地蔵とは終生済度をしてくださる地蔵菩薩のことです。
五番の堂は、光音禅師が構想していた寺へ開基できなかった大師堂ではないかと推測しています。
小文間戸田井の渡し場は古くからあり「お遍路渡

し」と云われていたのですが、昭和に戸田井橋が出来ても布川(利根町)へは行かなかったようです。

【本国四国の第五番】

地蔵寺には、奥の院羅漢堂があり、等身大の五百羅漢像が安置されています。

志納金が必要ですが拝観価値は十分有り。

第八十八番、境内の薬師堂、結願(けちがん)札所。

ご本尊、薬師如来 移し寺、香川県医王山大窪寺

御詠歌、南無薬師諸病なかれと願いつつ

詣れる人は大窪の寺、

新四国相馬霊場では、巡拝始めの発願札所は何番から始めてもよいのですが、最後に巡る結願札所は八十八番で結願となります。八十八番は同境内に置かれています。尚、我孫子市布佐台の浅間新田に、第八十九番が番外として建立されていますが、巡拝途中でも、または結願後に巡拝されても、どちらでも構いません。

【本国四国の大師霊場の場合】

大師霊場完拝後には、高野山へお礼の報告をしなければなりません、八十八ヶ所を巡った後の「お礼参り」は、常識となっています高野山奥の院御影堂に立寄りましょう。この時結願札所の「満願印」が必要です。

結願札所は全札所の最後に巡らないと、御朱印帳に「結願」印が押されませんので気をつけて下さい。

引越した長禅寺と十一面観音

承平元年(931)平将門の勅願所として、白山(現在の金刀比羅神社)に長禅寺は創建され、後に十一面観音を守り本尊にしたようです。

元禄八年(1695)取手の渡しを、勘定奉行の支配下にあったが実際は水戸藩の命令で水戸街道と定めた為、長禅寺は街道筋である当地へ移りました。

取手市の大鹿山の白山からの移転により、長禅寺山号の大鹿山を「だいろくさん」とも呼ぶお寺があります。

百一番三世堂、観覚光音の創案による

千躰観音堂が老朽化したため、栄螺(さざえ)堂建築形式に改築した三世堂を云います。

御詠歌、軒下にある「施無畏(せむい)」の扁額の下、鰐口の後ろに三世堂の御詠歌があります。

「 補陀落は いずこなるかと思いしに
今、大鹿に 法の花山 」

観音の極楽浄土は何処にあるのだろう、と思っていたが大鹿山長禅寺に、法華の浄土はありました。

と「ひらがな古書体」で記されています。

文暦元年(1234)平將門の弟、将頼の子孫と言われる、大鹿左衛門尉綾部時平が十一面観音を建立したと伝えられています、十一面観世音菩薩立像は安阿弥(あんあみ)慶派の快慶(法号)作と云われています。

宝暦十三年(1763)、長禅寺住職幻堂和尚は、弟子であった光音に、朽ちかけた観音堂の改築をまかせました。堂棟の扁額に光音禅師の名がみえる。

一階にご本尊の十一面観音と坂東三十三観音、二階に秩父三十四観音、三階に西国三十三観音の百一体の観音像が奉られています。観覚光音禅師の発願で各階毎に壁面を活用して百一体の観音像を安置し賽銭箱を設置しております、ここに賽銭箱のカラクリが潜んでいました、賽銭箱の底は一階のある場所に集まるように工夫されており、賽銭箱には賽銭が残らないのです。現在も痕跡は残っていますが使われてはいませんでした。

又、栄螺堂の特徴として、外観は二階建てに見えますが内陣は三階建てで、階段は上りと下りが別々とされ、一方通行方式になっており、三階建ての珍しさもあり、三世堂は当時人気となり諸国近隣より人々が集まるようになりました。

(参考文献取手市史、長禅寺縁起)

以前は、三階の中央部分から下を覗くと一階フロアが望めるアトリウム(中庭)のような吹き抜けになっていましたが、現在は板を張り塞がれています。

安永九年(1780)に建立された栄螺堂のルーツといわれる、江戸本所五百羅漢寺三匝堂(さんそうどう、倒壊により現存しない)に次いで古く、現存する栄螺堂では日本最古と言えます。昭和46年改築により、賽銭回収方式の廃止とアトリウムは建物全体の歪みにより補強され板張りとなりました。

栄螺堂としての発想は観覚光音禅師ですが、建立は幻堂和尚でありその御心を尊ばなければなりません。日本いや全世界的視野を含めて、最古の栄螺形式建造物が仏殿として残されていることは、貴重なことで無くしてならない日本の財産といえます。

御開帳は、毎年四月十八日に堂内を公開します。

全国にある歴史的な栄螺堂

観音霊場への旅が難しい地理的な問題を短時間で解決してしまう百(千)観音堂や栄螺堂でした。

医療では解決できない難から救われるには祈願しかなかった時代では、多くの人々が訪れてきたのでしょう。また、不思議なことに歴史ある栄螺堂は関東から北の地方に存在しています。

江戸本所羅漢寺三匠堂(倒壊)、寛保元年(1741)建立
会津若松飯盛山、寛政八年(1796)ねじれ建築
埼玉県児玉町百体観音堂、寛政四年(1792)
群馬県太田市曹源寺栄螺堂、寛政十年(1798)
取手市長禅寺白嗣殿三世堂、宝暦十三年(1763)
青森県弘前市六角堂、享和元年(1801)ねじれ建築

江戸時代からの古い栄螺堂形式の建築物で現存しています。創立順では江戸、取手、児玉、太田、会津、弘前の順序になりますが、江戸本所羅漢寺の栄螺堂は、浮世絵では知られていますが、倒壊により現存しません。会津三匠堂以外、現存する栄螺堂は、地震や火災で再建されています。取手も倒壊により享和元年(1801)再建されました。

ご存じでしょうが、会津飯盛山の栄螺堂は世界的にも大変珍しく国宝です。建築様式が独自で「ねじれ建築」で、さざえの貝殻の様に螺旋にねじれているので会津若松へお越しの際は、是非ご覧ください。

但し、内陣の百観音像はありません。

天高し　ピサの斜塔と　さざえ堂　　櫻桃子

櫻桃子(おうとうし)は、昭和の有名な俳人です。取手市山王出身の高野素十他ホトトギス４S仲間で素十は岡堰の句を山王に沢山残しています。

長禅寺と三世堂は出会いの場、出会い祈願の寺！

三世堂には、ロマンチックな噺が残っています。

一、**平將門と桔梗御前**の出会い、正室の居る將門が、佐原の豪族の桔梗に出会った場所といわれる伝説。

長禅寺は、承平元年(931)に平親皇將門相馬小次郎(平將門)の勅願寺として創建されたと云われていました、その創建式典で桔梗に出会ったという伝説がありました、妾である桔梗御前の伝説は取手市内に数多く残されています。

二、新聞小説や家庭小説で著名な小説家、**菊池幽芳**(ゆうほう)**と取手染物屋の杉浦玉枝**との、しばしの別れの舞台になりました。明治24年に二人は結婚し生涯を共に過ごしています。

幽芳の新聞連載小説「白蓮紅蓮(しろはすべにはす)」に昭和初期の栄螺堂の様子が描かれています。

廃本のため入手不可ですが、相馬霊場のホームページの郷土史書庫に掲載してあります。

菊池幽芳著作「白蓮紅蓮」、明治時代の栄螺堂の様子 2016 年1月5日の掲載より。

三、高村光太郎の妻智恵子の看病をした姪の看護婦である**はる子は宮崎仁十郎の息子である宮崎稔**と結婚しています。「利根川の美しさは 空間の美である」と光太郎は名言を残し、牛久に在住していた小川芋銭の「景慕之碑」に筆を残していかれました。

取手に一時在住の「智恵子抄」の、高村光太郎。

光音堂と観覚光音禅師、(かんがくこうおん ぜんじ)

相馬霊場を開基した光音禅師は天明三年(1783)十二月十七日没、ここに火葬され永眠しています、

他の地へも分骨され、白山の光音堂、生誕の地である長野県海尻町八ヶ岳高原鉄道の海尻駅(松原湖近隣の千曲川沿い)の墓地に分配納骨されています。

我孫子東源寺第75番には位牌が残されています。

東源寺は、空海生誕の善通寺からの移しです。

光音は東源寺に榧(かや)を植樹して相馬霊場中回向処(なかえこうどころ)としました。相馬霊場の中間地点になる東源寺は光音にはお気に入りの地であった様に思われます。

小林一茶の句碑「下総の四国巡りやかんこ鳥」

一茶の書「七番(しちばん)日記」には、この頃一茶は相馬に度々訪れていた記述が残っています。

旅の目的は、流山の双樹、布川の月船、守谷西林寺の鶴老(かくろう)、富勢の雪月庵嘯花(しょうか)、等や取手の国学者沢近嶺(さわちかね)との俳諧仲間の交流により49回も訪れたと云われています。

「閑古鳥(かんこどり=カッコウ鳥)」について、

俳句の季語で夏を表しますが、「閑古鳥が鳴く」と「鳴く」がつくと意味が違ってしまいます。

「鳴く」と読まれていないので寂れる情景を詠った句ではなく、静かな境内で「カッコー」と鳴く鳥が響き渡る夏の情景を詠んでいる句となります。

また「この句は長禅寺で詠まれた句ではない」と云う著書があります。俳句は何処で詠まれたか場所を特定することが難しいのですが、一茶の著書「七番日記」文化七年(1810)四月四日の最後の行に「下総の四国巡りやかんこ鳥」と記されています。

一茶はこの日、牛久を出発して若柴(佐貫)から小金(松戸)へ移動していた様子です。

只、この句が詠まれた5日前に相馬郡高野山村の最勝院に来て「櫻木や同じ盛りも御膝元」と桜(春)

を読んでいます。「かんこ鳥」は夏の季語です。
かんこ鳥は読み溜めした句なのでしょうか。となると、最勝寺での読み句の可能性もあります。
文化七年頃の下総国の新四国霊場は東葛印旛と相馬しか無かったので、一茶が旅した場所から推察すると長禅寺か最勝院のどちらかと思われます。
七番日記では「翌六日は田川(河内)に入」と記され、更に、渡し場で足を踏み外して利根川に落ちた老女お遍路さん事件があり、土左衛門が浮上しないため同行の仲間が足止となる話しが記されています。
この様に、牛久や河内、取手を歩いていた様子が伺え、北相馬辺りに居たことは間違いありません。
長禅寺境内には他に**清涼亭という**休憩所があり、河童の絵で有名な小川芋銭による命名です。

第三番、市民会舘前の八坂神社境内、西照寺(廃寺)。
祭神、素盞嗚命、牛頭さまとも呼ばれる。厠
ご本尊、不動明王。移し寺、徳島県亀光山金泉寺
御詠歌、極楽のたからの池を思へただ
黄金の泉　すみたたへたる
江戸時代、この地に西照寺という八坂神社の別当寺があり、そのお寺でお守りしていた大師堂のなかには柔和な面差しの大きな弘法大師像と、西照寺の名残本尊であった不動明王が矜羯羅童子(こんがらどうじ)と制多迦童子(せいたかどうじ)の脇侍を従えていました。脇侍は現存不明。
取手宿の鎮守、八坂神社は素盞嗚命(すさのおのみこと)を奉斉し、地元の人達から「天王様」と親しまれています。寛永三年(1626)創建、拝殿天保三年。
本殿は明治三十六年に修復され、周囲の壁に細密な彫刻が施されています、特に左右の向拝柱に登り龍、下り龍の勇壮豪華な彫刻があり、笠間の名工であった後藤縫殿之助と嫡男**後藤桂林**、弟の**後藤保之助**、波の欄間(らんま)彫刻で有名な波伊八の**四代目高石伊八郎**、むじな渕(間宮林蔵生家近隣)の**寺田松五郎**の手によるもので、彫刻の寺で有名な柴又帝釈天の彫刻を手掛けた同じメンバーでした。この五人の名が刻まれた基壇の組石が本殿後ろに残っています。
社地には寛保三年(1743)銘の華麗な松竹梅を刻んだ石灯籠や、文政九年(1826)作の関東屈指の大神輿などがあり 往時の宿場の繁栄が偲ばれます。今も、夏の祭礼は近隣にきこえ、盛大なものです。
西照寺跡は、取手市内で最初の小学校である里仁小学校と言われました、取手文化会館がある所です。
里仁小学校は、現在の取手小学校として台宿に移っています。

第二番、取影山念仏院念仏寺、浄土宗鎮西派、
もと大鹿山弘経寺の末寺。
ご本尊、阿弥陀如来。移し寺、徳島県日照山極楽寺
御詠歌、極楽の弥陀の浄土へ行きたくば
南無阿弥陀仏　口ぐせにせよ
取手八景の一つ「念仏院の暮雪」利根川の雪景色は素晴らしかったようです。
念仏院は弘経寺の末寺でしたが戦後独立して一寺となっています、昔は共同墓地であったため、いろいろな宗派の墓石があります。その中に、幕末の取手で生まれた国学者で歌人であった**沢近嶺**(さわちかね、1788～1838)のお墓があります。
市内の新町に居がありました。沢近嶺は通称油屋与兵衛といい、村田春海の門下でした。新古今集の歌をよくし、水戸斉昭公が自ら近嶺の家に駕籠を止めて、歌稿の添削を乞うたほどの学者でした。
「天つ神おこせし道を外国の　教えよりとぞ思うつたなさ」日本古来の教えを絶対的と思い込むのは正しくない、という教えです。俳号、月舎
しかし、取手宿の大火天保八年(1837)で原稿や家財そして蔵書を全て焼失し嘆きの翌年、他界しました。「春夢(しゅんむ)独談」が唯一残る著書です。
小林一茶(1763～1828)とは親子程の年齢差でしたが、国学者沢近嶺の影響を受け「天皇の袖に一房稲穂哉」天智天皇が民草(人々)を思う詩を一茶は残しています、更に沢近嶺はこの頃住んでいた両国の一茶宅を訪れています。
参道脇に紀州出身の浄土宗の高僧で、幕末期に庶民の間に名号を授け、十念数えるなど、日夜布教につとめた**徳本**(とくほん)**上人**独特の丸い書体で彫った『南無阿弥陀仏　徳本』の念仏塔があります。
文化十年(1813)前後、徳本は関東、特に利根川流域を巡礼したといわれ、その教えは世俗的であったため、庶民に熱狂的に迎えられたと云われています。
宝暦八年(1758)～文政元年10月6日(1818年11月4日)、江戸時代後期の浄土宗の僧で俗姓は田伏、法号は名蓮社号誉、紀伊国日高郡の出身でした。
徳本の「こむら返り」治療法、口語(こうご)
又一つ大事な事を教えてやろうが、是は心得て置てよい事ヂャ。男でも女でも、こぶら返りといふ事をするものじゃが、其の時に、男なら「きん」を下

から上へなで上げると忽ち直る。女は「ちち」を下から上へなで上げるとなをるなり。是ハ大事の事ヂャからよく覚えて置くがよいぞ。　徳本上人口語

大師堂後方の墓地内から六番への近道でもある大師道があり、古い建物が残る細い路地を進みます。

昭和の取手が所々に伺えます。

第六番、台宿の薬師堂。ご本尊、薬師如来。

移し寺、阿州(徳島県)温泉山安楽寺

御詠歌、かりの世に知行争ふ　むやくなり
安楽国の守護をのぞめよ

堂前には多くの石造物や碑があり、地元台宿の出身で、大利根架橋や常総(常陸国の常と下総国の総)鉄道敷設に功績のあった寺田翁の頌徳碑(しょうとくひ)は小川芋銭が揮毫(きごう)した石碑です。

隣は取手第二高校で、以前は女子校でしたが甲子園の高校野球全国大会で優勝した功績は木内監督と共に取手の人々の心に焼き付いています。

四国の第六番温泉山安楽寺は、山号名の如く薬師温泉があり入浴と宿泊が出来る宿坊です、但し団体が多いので個人の場合は、事前に予約が必要です。

第十番、台宿の観音堂。

ご本尊、十一面観音菩薩

移し寺、徳島県得度山切幡寺(とくどざんきりはたじ)

御詠歌、欲心をただひとすじに切幡寺
のちの世までの　さはりとぞなる

大師堂西側の手前には古い馬頭観音石像があり寛文十一年六月(1671)と刻まれています。

取手八景と言われた場所でした、観音堂の夜雨、洗心静思(せんしんせいし、心の汚れを洗い清め心静かに思う)の仏事にて、雨の夜の、ことに浮世の心を忘れする清い所なり、と選ばれた地でした。

四国の第十番は、女人済度の寺千手観世音菩薩は、機織の娘が成仏した菩薩像で、はたきり観音の異名もあり女性信者に人気の霊場です。

第四番、台宿の不動院。

ご本尊、大聖不動明王。

移し寺、徳島県黒巌山(こくがんざん)大日寺

御詠歌、ながむれば　月しろたえの夜わなれや
ただ黒谷に墨染めの袖

江戸田山不動院は東福院の境内にあったもの、東福院は、土浦の法泉寺の末寺(廃寺)。子授け不動と言われていました、御開帳は一月二十八日です。

説明版に山号「江戸田山」(場所不明)とある。

ある時、ここの本尊を盗んだ悪人は始末に困り畑に捨てたと言う、ところが夜になるとその畑は金色に輝き出し、村人は不思議におもい畑を調べたところ、本尊を見つけて本堂に返したと言われています。

取手市台宿チューリップ幼稚園のある交差点には、江戸田山不動院と新四国相馬霊場第四番札所の二つのお堂が並んでいます。お堂の前の道は、二手に分かれ左側の狭い道は、取手一高の正門前を通り、JR常磐線上の四ツ谷橋跨線橋へと続きます。

井野に東福院と台宿に東福寺が存在したが共に廃寺、似たような寺名ですが東福院は土浦法泉寺門徒で東福寺は真言宗高野山末寺と全く関係ありません。

「井戸田山不動院子授け不動尊」の墓地と御堂は五百m先にあり、こちらは「井戸田山」とある。

墓石が20基程あり、長方形に近い敷地の中央に「不動院」と扁額に書かれたお堂が鎮座しています、山門には銅版に「井戸田山、子授け不動尊　縁日一月二十八日」と記され、門を入ると左側に、堂再建記念石碑が建っており「本尊、井戸田不動明王、下総国相馬郡台宿村不動院　文化四年(1807)卯正月」と刻まれています。井戸田を江戸田と言ったのか？

御堂は平成4年12月に改築されました。

井戸田は青柳の金門酒造、とりで医院辺りの字地名で使われていました。井戸田山が正解？

さて同じ村内で、不動院が二つもある訳がありません、明治時代の地図と取手市史を調べると、第十番相馬霊場札所塔は安永五年(1776)に百番為二世安楽奉納により光音禅師ともない建立、御本尊の十一面観世音菩薩を観音堂に残し不動院とは無関係。

台宿坂上の十字路角にある第四番の不動院は、第十番観音堂下の墓地内の不動堂を含み、旧不動院の本来の本拠地で本堂は此処にあったものです。

やがて寺院を縮小し、不動院は墓地と大師霊場四番札所を残して檀家だけとなり、拠所を光明寺から昌松寺管轄としています。

不動院が香取神社(村社)の境内に移されたのは明治末か大正で、昭和初期の相馬霊場巡拝図では現行と同じルートで台宿坂上となっています。

佐倉道

佐倉街道は、古くから水戸街道新宿(中川)から分岐した、市川～船橋～佐倉間が正式な街道名として実存します。

しかし、江戸時代の佐倉藩は、藩領統括地として常陸国小田、下総国の守谷、小文間を支配していました。

従って台宿に佐倉藩の藩道が整備されていました。

その一部が、佐倉から木下、湖北の中峠(なかびょう)、古利根小堀の渡し、小堀へと佐倉藩道は延び、取手八坂社から取手本陣の裏の坂を通り神明坂下、台宿坂上の八幡社裏側、第四番札所の十字路から取手駅寄りの小道、谷津道が佐倉道で井野天満宮へと続いています。

「佐倉道」または「守谷道」といわれていて、大鹿弘経寺を経て金刀比羅社の鳥居、取手競輪場入口前で右へ曲がり、常総線中原踏切の先で、再び方向を変えて常総線寺原駅方面に向かい、寺田青龍神社先の踏切を渡り国道294号を経て稲村池袋へと続き、稲戸井、戸頭から守谷へ至っていた様です。

佐倉道については「利根川図誌」赤松宗旦著書では、青龍神社から岡、山王で小貝川を渡り山王新田、谷井田、谷田部で筑波山小田へとルートが違うが目的地は筑波の小田であり同じ処となっています。

この利根川図誌の佐倉道は、現在の茨城県道19号と道の経路が一致しています。

但し県道19号は筑波北条が着地となっています。

第二十番、井野の地蔵堂。昔の地名は台宿でした。ご本尊、地蔵菩薩。移し寺、徳島県霊鷲山鶴林寺、(りょうじゅさん かくりん じ)

御詠歌、しげりつる鶴の林を　しるべ　にて
大師ぞいます　地蔵帝釈

相馬霊場保存会指導者高橋栄勝師記念碑が大師堂の向い側に建っています。大師堂の改築と霊場発展の為に終生努力された相馬霊場の偉人で、地蔵堂境内に居住されていました。昭和12年11月享年68。

顕彰碑は死後に地元後援会の寄進により建立。

……　相馬霊場を巡拝すること百数十度、腐朽著しき大師堂は私財を投じて再建し、又は多数信者を指導して改築建立せしめ、霊場発展の為終生努力…

とあります。

御堂前の通りは古く現在も通勤する人々が取手駅への通勤路として使われています。

東福寺は、この地蔵堂の左側墓地後ろの取手一高校舎辺りに移転し在寺していたと思われます。

【本国四国の20番】

鶴林寺(かくりんじ)は、相馬霊場の20番と違って、一里強の山道を登ります。「胸つき八丁」「お遍路ころがし」と云われる難所でした。しかし本堂の前で二羽の白鶴に迎えられると疲れも癒されます。とは、過去のことで、今は長い石段だけで済みました。また、この寺の宿坊で一泊すると説法を聞くことができます。

第三十一番、井野桜ヶ丘の天満宮。

祭神、菅原道真、ご本尊、十一面観世音菩薩。

移し寺、高知県五台山竹林寺

御詠歌、南無文珠　みよの仏の母ときく
我も子なれば　乳こそほしけれ

天満宮の祭神は菅原道真公で、室町末期の天正元年(1573)二月二十五日、道真公が昇殿された日に京都北野天満宮より分霊してお祀りしたとあります。

災難除け、風邪除けと二種類のお札があり、僧侶像が祀られた小堂が並んでいます。

堂の中に御詠歌が掲げられていて「このかどを除けてとうれよ風邪の神　大師すがたの　あらん限りは」とあり、お札として以前は持ち帰ることが出来ました。風邪と風は、我家を避けて通り過ぎて下さい。という願掛け参りの御堂です。また弁財天、稲荷大明神、石尊大権現、八幡宮等の石碑が集められていて、庭の梅が咲頃は井野を見渡す景色も良い所です。

四百年間「井野天満宮」と呼ばれてきました、それが井野神社となるとわびしさが膨らみます。

【振り回された第三十一番札所】

井野天満宮本殿は、菅原道真を祀ってあり、学問の神らしく広い境内の半分は梅林の古木で占められ初春の観梅時期は、進学祈願で賑いました。

記憶では、ここの大師堂は、昭和40年代の頃、取手駅東口前は、紡績工場の跡地に片倉ショピングプラザビルが建ち、イトーヨーカ堂が営業を始めた頃に、ヨーカ堂と取手駅の間、横断歩道の交差点の角に、二つの小さなお堂が建っていました。この頃は、このお堂がなんなのか知るよしもなく関心もありませんでした、しかし、後年相馬霊場に関心を抱き始め、霊場を調べ始めると、記憶はおぼろげでしたが「取手市史、民俗編Ⅱ」第五章「信仰」第四節「大師参りと光音講」の「井野のお大師様」に、イトー

ヨーカ堂前の大師霊場札所を証言してくれている文面に出会いました。

三十一番はヨーカ堂前にあり、天満宮の札所は掛所だったという。ところがある日、村の老人達はヨーカ堂前の札所堂を取り壊してしまい、札板の三十一番を天満宮へ持って行ってしまった、もっとも天満宮の境内の方が相応しい場所でかえって善かったかも知れない。という記述でした。

また「天神様は三十一番の風の神様でしょ」「この三十一番が風の神様で『この門を よけて通れよ 風の神 大師姿の あらん限りは』ってこういうお札を軒先に貼っておくといいというんです」、この当時、柴沼旅館の中に貼ってあったようです。

31番札所は光音禅師によって、井野天満宮に創建、明治中期に東福寺建立に伴い栗山台に移動、東福寺台宿に移動により、取手駅前片倉工業門前に移動、そして再び、井野天満宮に戻されました。

四国第三十一番は、高知市の竹林寺で本堂裏の夢窓国師による蓬莱山庭園は見るべし、志納金三百円が必要ですが、宝物館の秘仏拝観が含まれています。「南国土佐をあとにして」の歌で有名なお寺です。

余談ですが、歌手でしたペギー葉山さんの旦那様亡根上淳は、大鹿弘経寺に眠っておられます。

1～2度境内で法事時にお会いしました。

第六十一番、井野桜ヶ丘の大日堂、万蔵院跡地

ご本尊、大日如来。
移し寺、愛媛県梅檀山香園寺(せんだんさんこうおんじ)
御詠歌、のちの世を思えばまいれ香園寺
とめてとまらぬ白滝の水

大龍権現といわれ井野、桑原、台宿、青柳、吉田地区の総鎮守でした。

すり粉木が奉納されています。すり粉木で痛い箇所を叩くと痛みが無くなると言われ、完治した時には、新たにすり粉木を奉納してお礼参りをする風習が全国的にありました。

札所前の道を更に東方へ五百メートル先に、本多作左衛門重次の廟所があり墓碑があります。

四国第六十一番の宿坊は子宝湯浴場の温泉付です。

本多作左衛門重次の墳墓、別名御墓山、県指定史跡。

本多作左衛門重次は「一筆啓上、火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」の手紙で知られる徳川家康の家臣でした。鬼作左(おにさくざ)と呼ばれました。

享禄二年(1529)三河に生まれ、松平清康、広忠、家康に仕え、晩年を下総国相馬郡井野で過ごし文禄五年(1596)、六十八歳で病死しました。

「寛政重修諸家譜」慶長元年(1596)七月十六日井野に於いて死す。法名高分。その地「青柳本願寺に埋葬」は間違えで「井野御墓山に埋葬」です。

玉垣に囲まれた三つの墓塔が史跡となっています。

中央の大型の五輪塔が重次の墓で正面には梵字が刻まれています、特に銘はみられない。

右側のやや小型の五輪塔は「坂休院、寛永四丁卯九月十二日、体誉一源浄本居士」の銘があり、重次の客人であった岡野彦五郎という人物の墓です。

左にある尖頭型の墓塔には「本多九蔵藤原重玄(しげはる)之墓」という銘があるので、永禄元年(1558)に戦死した重次の弟の重玄の墓になります。

尚、福井県坂井市丸岡町の本光院にも墓がります。

現在、鬼作左の遺品が青柳本願寺に残る。

鬼作左の死後に本多家の菩提寺となりました。

晩年の作左は向側の井野台の城山観音寺辺りに居住して、毎晩のように酒宴で「ドンチャン騒ぎ」、近所の人々には評判が良くなかった様でした。

光明山傳教院本願寺(青柳本願寺)の歴史見直し。

浄土宗鎮西派、京都東山の華頂山知恩院直末寺。

傳教院本願寺は、応永三年(1396)、**三輪台**に了誉聖冏(りょうよしょうげい)により開基されました。

聖冏(号は西蓮社了誉(ゆうれんじゃりょう)常陸国真壁庄椎尾郷出身(暦応四年(1341)～応永27年(1420))、瓜連常福寺の了実について出家し、同国太田法然寺の蓮勝に師事。江戸傳通院を開創している。

「三輪台」とは何処なのか。我孫子市の本願寺山眼前の利根川田中遊水地に、かつて本願寺沼があり、明治22年の陸軍地図に記載があります。

寛永三年(1626)の口碑、柏市土谷津と我孫子市久寺家の境に字本願寺という地名があり、口碑で古本願寺跡は須賀本願寺と言われてきました。

「下総青柳村へ引越したが、舟で七里ヶ渡しをわたる時、釜を落としたそうな・・」とあります。

寛永九年(1632)増上寺貫主了学偏纂「江戸幕府寺院本末帳集成、浄土宗増上寺末寺帳」に下総須賀本願寺とある。須賀本願寺＝青柳本願寺。

年代順から既に移転により「青柳」の誤記。

このような青柳本願寺の歴史により、本多重次

(享禄2年(1529)～文禄5年7月16日(1596/8/9))が亡くなった時点では青柳に本願寺は無く、故に御墓山に重次は埋葬されたといえます。

伊奈検地により、青柳に本願寺寛永十一年(1634)領有の記録があるようです。

本願寺十八世真誉(取手市史では八世直誉)、元禄十四年(1701)二月二日作左衛門一族17名「断絶回向のお詫び」に接客、既に青柳本願寺となっている。

之により、**応永三年(1396)開山とされてきた青柳本願寺説は覆いされる。**実に230年間実在していない。

本願寺十五世閑誉、明暦元年(1655)本願寺末寺の新願寺改め本泉寺として開基。

「茨城史林」2006.06/第26号茨城地方史研究会編集、「本多作左衛門の原風景」日本随筆家協会刊から

本願寺は、後に藤代の高須大師霊場の開基に寄進貢献しています。また圓光大師(法然)霊場でもある。

本多家の家紋、青柳本願寺の鬼瓦にも使われていた。

丸に右離れ立葵

葵家紋と徳川家あれこれ

丸に立葵で知られている「本多立葵」。外にも本多立葵に似ていますが「丸に右離れ立葵」や「丸に左離れ立葵」、また「丸に変わり花 立葵」等があり、更に、水戸家江戸屋敷跡の後楽園の唐門に「六葉葵紋」が軒瓦に使われ大変珍しい裏家紋があります。

本多立葵でいえば、ご存知でしょうが京都市の賀茂神社の神紋が「二葉葵：ふたばあおい」の紋。葉が二つ付いているので二葉葵といいます。

神官である本多氏はこの二葉葵を変えて家紋にしました。葉を3つにしてバランスをとり、軸を右から縦に切って、二葉の意味をもたせました。

珍説ですが「なんでこんなことをしたか」といえば、紋屋が塗り込めたからといいます(?)。

賀茂神社の裏の神山には、昔から葵が生えていました。この草を神殿に飾り、神の降臨を祈りました。

これが後の「葵祭」となります。

その祭りの神官が本多氏でした。

葵紋家は藤原氏兼通流本多氏、清川流本多氏ほか、清和源氏支流の平井氏、山田氏は「立葵」。

藤原氏兼通流の藤田氏が「右離れ立葵」。

清和源氏頼光流菅原氏が「左離れ立葵」。

徳川氏の「徳川葵」は別名「葵巴」といいます。

本多氏は賀茂神社の神官ですが、徳川氏は賀茂神社の氏子といわれています。ですから、賀茂神社の葵と神社のシンボルである巴を合わせた家紋を作り使用しました。

徳川家康の父親である松平広忠の墓に刻まれている家の紋は「剣銀杏紋(剣と銀杏の葉)」。葵巴が、いつごろから徳川が使用されたのかは不明です。

徳川が天下を取ると、他家の【葵紋】の使用を禁止しました。

これによって葵紋を使用していた多くの家は、葵紋を家紋に使用することをやめました。

ただし神社の神官であった本多氏や信濃の善光寺は、「徳川家が天下を取る以前から使用していた」ことに居直り、葵紋の使用を通しました。

それ以外に葵紋を使用している家は、清和源氏頼光(よりみつ)流の多田氏(葵車)、藤原氏秀郷流の川村氏(剣葵)、藤原氏支流の内田氏(花葵)などが使用しています。

三つ葉葵の紋様は、年代や尾張、紀伊、水戸、松平家により葉の葉脈の数や形が違います。

また明治以降は、葉脈の数が多い程新しく、徳川何代目なのか分るのだそうです。

植物としては実存しない三葉葵です。

第七番、大清山心光院本泉寺、浄土宗鎮西派。

ご本尊、阿弥陀如来、

移し寺、徳島県光明山十楽寺

御詠歌、人間の八苦を早く離れなば

到らんかたは　くぼん十楽

明暦元年(1655)に新願寺として創建、同五年青柳本願寺移転改装に伴い、ここへ一時移転時に本泉寺に改名された。青柳本願寺と同じ本多家の立葵の家紋が目に入る。大師堂は安永五年(1776)の創建。2007年に本堂は改築されました。

堂の前に取手では珍しい道しるべ、三界万霊塔(さんかいばんれいとう)があります、

「右地蔵堂ミち 三界万霊 七番札所 左八番札所ミち」と記されています、取手では三界萬霊塔はあまり見かけません。三界とは、仏教界では欲界、色界、無色界をいい、欲界というのは、食欲、性欲、睡眠欲を言い。色界は食欲よりも性欲の強いことを言い、無色界は性欲のない心の世界を言います。

万霊というのは欲、色、無色界の有情無情の精霊

などのあらゆる世界をさしている訳で、それらの供養の対象が三界萬霊塔になります。

四国の十楽寺の門前では、参龍者に振舞われる「たらいうどん」は、徳島県産のうどんで味も好評です。

第十四番、吉田の地蔵堂墓地内

ご本尊、延命地蔵菩薩、

移し寺、徳島県盛寿山常楽寺

御詠歌、常楽の岸にはいつか到らまし
　　ぐぜいの船に　乗りおくれずば

大師堂は大きく龍の彫刻は彩色です。2006年の春、野田からのお遍路さん30名ほどの団体に、ここで出会いました。「毎年二月下旬の日曜日に訪れています」と話されていました。

道の向かい側に、取手市埋蔵文化財センターがあります、取手の歴史資料を入手することが出来ます、2007年に合併した北相馬郡藤代町の資料も揃っており、合併後の当センターの催し事には、地元の歴史に関心をもつ方には無視出来ない重要な場所となっています。

第十一番、薬師堂、吉田消防団敷地内

移し寺、徳島県金剛山藤井寺

ご本尊、薬師如来には脇侍の日光菩薩と月光菩薩に十二神将像が安置されています。

御詠歌、色も香も　無比ちゅうどうの藤井寺
　　真如の波の　たたぬ日もなし

昭和14年火災の際、近隣の人はリヤカーで薬師如来、日光、月光菩薩、十二神将をすくったのですがオビンズル様は燃えてしまったそうです。

昭和52年公民館として建てなおされ、眼病に霊験があると言う薬師像は集会所の中にあります。

大師堂内の左の瓦像は光音禅師座像です。

薬師堂にたまたま居合わせた古老の話では「昔は櫻の花見頃二日掛りで八十八ヶ所を巡った。戸田井より布佐まで五十人ぐらい乗り込んだ舟で下って、向こう側の札所を巡り我孫子で一泊、布施弁天から戸頭へ舟で渡りこちら側を歩いた。距離は一日目十里、二日目八里と言うところか。」当時の八十八ヶ所巡りは強行軍であった様です。

第十三番、八幡山加納院(廃寺)、吉田八幡神社、

ご祭神、誉田別命(ほんだわけのみこと)、

加納院のご本尊、八幡大菩薩、

移し寺、徳島県大栗山大日寺

御詠歌、阿波の国一の宮とはゆうだすき
　　かけてたのめや　この世のちの世

永禄元年(1558)の創建で、誉田別命、応神天皇を祀る。寛永六年吉田村の氏神となり、5年後に拝殿が建立されました。神社内には三峰神社と愛宕神社も祀られています。大師堂には二体の弘法大師像があり下段に光音禅師像が祀られています。

境内には、安永五年(1776)の札所塔や文政四年(1821)銘記の侍道大権現の祠(ほこら)があります。

この一帯はかつて主膳新田、雁金村と呼ばれていましたが、慶安二年(1649)に吉田村となりました。

打止（うちどめ）

旧水戸街道

八幡神社脇の道は、取手市藤代旧庁舎前まで、ほぼ一直線の道ですが、取手市内では最も古い水戸街道です。明治五年(1872)4月29日に武蔵国の千住から陸前国岩沼までの太平洋岸の街道を今後「陸前浜街道」と呼ぶという通達が出されたことによります。

しかし明治18年、国道番号制により廃止となる。

取手の陸前浜街道は、取手市東から青柳を経て、谷中の日清食品近くに至る県道299号が該当します。

地名「取手」の発祥は「砦」

取手の郷土史に触れると平将門の話が多くあります、取手市史余禄には平将門生誕地説まで掲載されています。しかし、現在では取手も守谷も、将門が直接関与した歴史は無く、相馬家や将門に関連した歴史跡と伝説に分類されています。

守谷城は平将門の居城とされ「古都守谷」と呼ばれていましたが、江戸時代中期頃から「偽都守谷」と呼ばれる様になりました。

偽都とは、東国王平将門の居城と云われていた守谷城は、将門の末代相馬氏による居城であったために守谷は都と呼ぶほどには至らずということです。

更に、下総相馬家は、豊臣秀吉の小田原城攻で落城と共に衰退しました。

取手地名の起こりは、戦国時代大鹿太郎左衛門の砦が大鹿城と呼ばれていました、現在の取手競輪場南ゲート坂の崖側にありました。大鹿家は代々なぜか「鹿」を大事に飼っていた様です。

大鹿の「砦」が、取手地名の起源であって、「取っ

手」ではありません。

平安時代末頃、伊勢神宮の相馬御厨として、守谷や戸頭の旧小字名が史料にあることや、中世の戦国時代になると、稲村、戸頭、高井、大鹿などの地名が相馬氏の領地として登場しています。また、「取手」「鳥手」「鳥出」という標記が古文書や台宿坂上の佐倉道八幡神社後ろの祠で見ることが出来ます。

明治8年(1875)利根川を県境となる迄は、常陸国ではなく、千葉県に属し永い歴史を経ています。

取手の井野から小堀の分離で消えた村

大正3年(1914)利根川の大改修工事で分断され、元の流れは古利根沼という三日月湖となる。

取手町郷土史資料第二集や取手市史余禄を見ると、明治の利根川改修の際に消えた集落があるとの記述がありました。大利根橋の近くから元宿、房田という部落がありましたが、今は河川敷に沈んでいます。

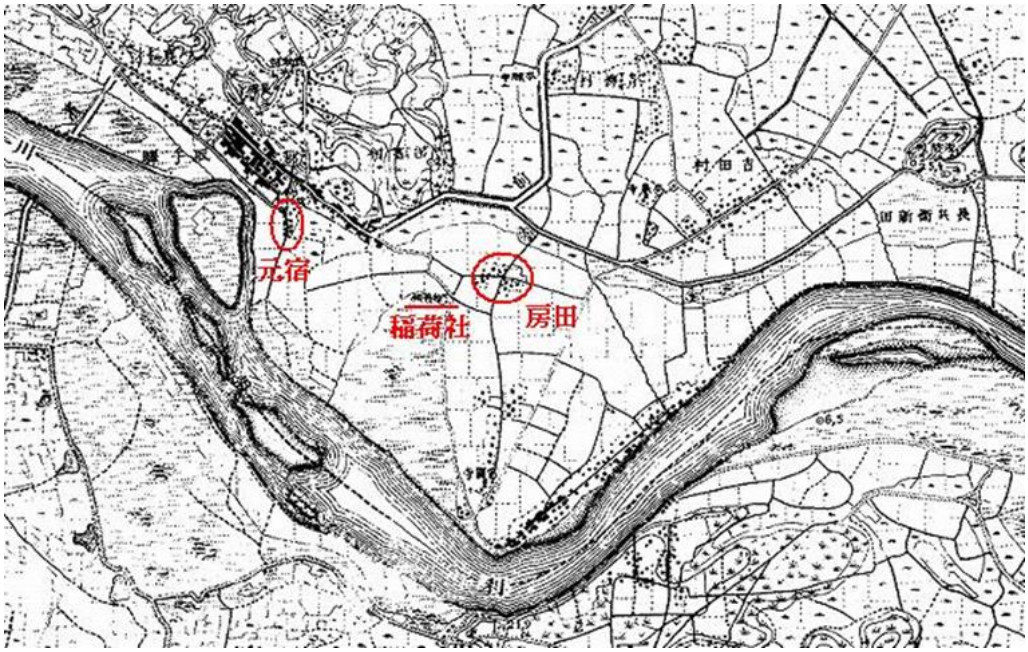
元宿、一部が河川敷になった地区に元宿(もとじゅく)がありました。元宿では現在の土手を作るため、その一部が内務省に買上げられ、何軒かの家が河川敷になってしまいました。丁度八坂神社の西側の道を真直ぐに行って土手を越し、川に向って行く途中に買上げられた人達の家があったようです。

(取手市史余禄)

十二竈、大改修により、取手の発祥の地ともいうべき染野一党の住んだ部落跡も水底に没し、いまは『十二竈(まど)』という地名を残すのみとなりました。十二竈の『まど』は『かまど』の訛ったもので、『かまど』は戸、または軒と同義語で、いずれも家の数をあらわします。すなわち、『十二竈』といわれるところには、十二軒の家があったわけです。

尚、辞書では竈＝竈、「まど」とは読まない様です。

この十二竈部落の鎮守は稲荷社で、十二竈が河底に没するとき台宿の東福院境内に移されました。



利根川は取手で「く」の字に曲がっていました。
大正13年(1914)災害対策で直線化。3部落と竹村河岸が消えてしまいた。

取手町郷土史資料集を読んで見ますと、利根川改修の際十二竈はすでに集落はなく、地名だけ残っていたような印象を受けます。※台宿の東福院(台宿坂上のチューリップ幼稚園から谷地の不動堂辺りまで境内であったそうです、真言宗、不動堂は境内にあったもの)は廃寺で現存しません。

房田、大改修をする前、いまの新道地先の河原には、房田(ふさだ、ぼうだ?)という部落がありました。

房田は十戸ばかりの小部落で、大改修の際それぞれに移転させられました。取手には『房田の寄合い』という言葉があったのですが、その意味は、この部落は十戸ばかりの小部落だから「寄合(集会)」には出席率がよく話が早くまとまりそうなものだが、実に相違していつも集まりが悪く、話も仲々まとまらない。そこで取手では、集会を開いても出席が悪いと、『まるで房田の寄合いみたいだ』と笑ったという。

取手の闇賭場開帳は浅草でも知られていた

裏の取手のお話です、湯舟で博打・・・

昭和25年常総線貨車内賭博の摘発で終止しました。

土浦の医者佐賀純一の著「浅草博徒一代」に、小堀の様子を掲載しているのでご紹介します。ドクター佐賀は、この著書で全世界に知られています。

◆　深川からやって来たアウトロー　◆

数年前の冬のことだった。私の診療所に、背の高い肩幅のがっしりした老人がたずねてきた。顔が普通の人よりひとまわり大きく、額には黒いしわが深々と切れ込み、分厚い唇は紫色、目玉は汚い黄色味を帯びて、

見るからにひと癖ある、といった人相をしている。
裸になってもらうと、背中一面に刺青が彫ってある。「龍に牡丹」の彫物だが、寄る年波に色は褪せ、龍のうろこは雲のように淡く、髭はほとんど消えかけている。けれども絵柄は一種独得で、妙に心誘われるものがある。牡丹の花びらのなかに女がひとり立っている。龍は、牡丹もろとも女を飲み込もうとしている。女は目を半眼に閉じて合掌しているのだが、その唇にはいわく言いがたい微笑が浮かんでいる。ヤクザ＝刺青は日本国民にとって暴力と威圧の象徴で許せない。
私は、できることなら写真を撮りたい、と思った。
しかし、その男とは初対面であるし、それにその悠然たる態度になんとなく気後れして、とうとう写真のことは言い出せなかったのである。腹を診察すると肝臓が肥大している。
腹水がたまっているのかはっきりと分かる。
私は、男が診察台から身を起こすのを待って、言った。「総合病院に紹介しますから、そこで治療を受けたらいいでしょう」すると男はかすかに笑って、「先生、わたしは七十三になりました。この年になるまで好き勝手なことをやってきたんです。今更、治ろうなんて考えてはいませんよ」
口の中が煙草のヤニでひどく黒く、まるで底のない穴のように見えた。男は、低いしわがれた声をしていた。
「若い頃、少々無茶をやりましてね、この年になって体が動かなくなった。それで賭場は子分に譲って田舎へ引っ込むことにしたんです。土手の下に按摩(あんま)がいるでしょう。わたしは二、三度揉んでもらいましたが、ちょっとした腕ですよ。わたしはあの按摩にすすめられて来たんです」「そうでしたか」「誰が診たって、わたしの病気は治りませんね」
「どこかの病院で、そう言われましたか」
「自分で分かります。正直なところ、わたしは先生に、病気を治して下さい、なんて無理なことをお願いに来たんではないんです。ただ痛いときには、注射の一本もしていただけないかと、思いましてね。なに、ご心配には及びません。クスリをやってくれ、なんて頼んでいるんではありませんから。糖尿のせいでしょうナ足がひどく痛むことがある。そんな時に先生に診てもらって、注射でもしていただけないだろうかと、こんな虫のいいことを考えてお訪ねしたというわけです」
私は男の頼みに応じることにした。痛いときに面倒を見さえすればいいと言うのだから気楽なものである。しかし、診察を引き受けた本当の理由は、別にありました。
この男はありきたりの言葉ではとうてい言い尽くすことのできない不思議な魅力を全身に脹らせていた。毎日大勢の人々と顔を合わせてはいるが、こんな人物にお目にかかったことはかつて一度もなかった。できることなら、いつかこの男の話をしみじみと聞いてみたいものだ、と私は密かな期待を抱いたのだった。男は一週間に二度ずつ通院してきました。
幸い腹水は心配したほど増加しなかったし、足の痛みも小康状態を保っていた。こうしてひと月ばかり過ぎたある日、男から「暇を見て遊びに来ませんか」という誘いを受けたのだった。「あばら屋ですがね、お茶菓子と炬燵(こたつ)ぐらいはあります。先生は陽の当たるまっとうな世間を歩いてきたようですが、たまには変った話を聞くのも面白いかもしれませんよ」
翌日の夕方、冷たい雨が降りしきる中を男の家を訪ねた。男は炬燵の上に蜜柑(みかん)を山盛りにして私を待っていた。時々、奥の方から雨の音に混じって、三味線の小さな音が聞こえていた。
「娘がいたずら　しているンです」と男は言った。
その夜、私は三時間ほど男の話を聞いた。男は三十分ぐらい話すとくたびれるのか、お茶を飲んで一息入れて、「どうぞ、おひとつ」などと蜜柑をすすめて、自分も蜜柑を丁寧に剥いて食べてから、またしわがれた声で少しずつ話しを続けた。こうして私は、三日に一度は男の家に通うことになった。そして一通り聞き終えるころには、冷たい冬はいつのまにか過ぎて、うららかな風の吹きわたる春になっていたのだった。

◆　湯　船　◆

「親父の従兄弟が東京の深川の石島町で石炭の仲買をやっていましてね、店の名前は中川石炭店というのでしたが、わたしはそこへ預けられました」。
男はちょっと横を向いて、二、三度湿った咳をした。咳が治まると、彼は新聞の広告を裏返して、鉛筆で簡単な地図を書きながら、「石炭屋の前には、こんな具合に、小名木川(運河)というのがありました。すぐそばにお稲荷様があって、その向こうが扇橋と猿江の橋。川向こうには重願寺が見えて、その近くにはガス会社がありました。
小名木川を西に向かってどんどん行くと、隅田川に出る。反対にこっちのほうに、つまり東に下って行くと、中川に行き着きます。ある時、蒸気船に乗って小名木川から中川を横切って江戸川を遡りましてね、流

山の運河を通って利根川を取手まで下ったことがあります。取手の向いに小堀(おおほり)という村がありますが、そこの船頭たちが客を集めてバクチを開いている。その噂を聞いて、ちょっとのぞいてみようという気になったというわけです。

この当時、隅田川には通運丸という蒸気船が運航していました。これは外輪船で、船の両側で大きな水車がガタコンガタコンと回転する。下手な絵ですが、まあ、こんな船だと思えばいいでしょう。

こいつが利根川から霞ヶ浦に入って、この土浦の港まで通っていた。わたしはこいつに乗って小堀まで行きましたが、この村は昔からの船大工が沢山住んでいる。船頭も大勢います。案内された賭場は、宿屋なんぞではなくて、高瀬船を改造した湯船(ゆぶね、風呂桶の他、船着場などで、浴場を設け、料金を取って入浴させる船)というやつです。

これはもう廃船で、岸につないでありました。

中には風呂桶がしつらえてあって、回りの船頭の家族が入りに来る。水は下が利根川ですから不自由はしない。燃料は流木で十分まかなえる。

賭場と風呂場の間には仕切りなんぞありませんから、女も子どもも、目の前で裸になって湯船に入る。

そうして、男らが丁だ、半だ、と顔を赤くしたり青くしたりして夢中になっているのを、頭に手拭なんぞのせて見物しているンです。わたしもひと風呂浴びさせてもらいましたが、夏ですから障子は開け放しで、利根の川面に月が浮かんでね、そりゃ のんびりしたものでした」。

男は煙管にきざみ煙草を入れて火をつけると、炭火を見つめながらゆっくりとふかした。煙管を持つ手が微かに震えているので、褐色の雁首が火鉢の上でゆらゆらと揺れ動いた。

叔父は石炭の仲買人としては、かなり大きい仕事をやっていました。事務所の回りには見上げるような石炭の山が何十もありましたが、これは北海道や九州から買いつけたものです。

石炭を運んできた貨物船が横浜へ入ると、人夫が木造船に積み替えて、木造船を何艘ものダルマ船に曳かせて隅田川に入ってくる。そうして万年橋から小名木川を下って、工場だの商店だのが、ぎっしりと並んでいる川筋を通って会社まで運んでくるンです。

中川の店は川岸に五つの桟橋を持っていましたが、荷を積んだ船が桟橋に着くと、人夫がこれを担いで、石炭置き場に積み上げておく。注文があると、船や馬車に積んで注文主の会社まで運搬する。女に会いたくて出てきたんですが、西も東も分からない上にべらぼうに忙しくて、捜しにいく暇はまったくありませんでした。

以上抜粋

◆ ボブ ディラン ◆

フォークシンガーで反戦をテーマにした「風に吹かれて」が世界中で大ヒットとなり、有名になったボブディラン。彼の日本公演武道館へ行った思い出が甦ります。家内には不評で「つまらない」。

2003年7月7日、ウォール ストリート ジャーナル紙に「ボブ ディランは、ドクター佐賀の文章を借用したのか?」という見出しの記事が掲載された。浅草博徒一代は、Confessions of a Yakuza ある一人のヤクザの告白というタイトルで英語版が出版されており、ディランは、アルバム“Love and Theft”で、詩の種元として使われた、と言われた。しかし、当時の佐賀氏はディランに対し「使っていただいたとしたら光栄です」と称賛しました。

ディランは当時、フォークからロックに曲調を変えたために、ファンから冷たい視線を浴びていた。

だがディランは、ロックギターを放さなかった。

それらの詩に対して、ノーベル賞が与えられました。

※「風に吹かれて」を日本で有名にしたのは、ピーター、ポール&マリーの三人によるカバーでした。

こんな歴史話　小堀の舟上山車祭り

取手市小堀(おおほり)は利根川を挟んで飛地となっていますが、常磐線鉄橋が架かる明治29年までは取手市井野村の一部でした。小堀には、江戸時代から豪勢な祭りがあり、近郷に鳴り響いていたことが「利根川図志」に記載されています。

「夜に入りて神輿を船にて利根川に浮かべ流れに隋って静かに下る。船には幕を張り鉾(ほこ)を立て、夥(おびただ)しく桃燈(ちょうちん)を掛け、笛、太鼓、噺物(はなしもの)の声高欄(欄干のある舞台)の内に起こる、此の時後舟より煙火をあぐ、其の数甚(はなは)だ多し、之を看(見)る人両岸に雲集し、持連ねたる燈は月の如く水中に倒映して金波銀波を生じ、傍ら涼風に暑さを消し、酒食の興(きょう)を添えて実に此れ地の壮観なり」とある。舟上の「水上山車祭り」の様子が伺えます。海上渡御(かいじょうとぎょ)というが、神輿を使い山車で行う祭りは少ない。